

【公報種別】特許法第 17 条の 2 の規定による補正の掲載

【部門区分】第 1 部門第 2 区分

【発行日】平成24年2月23日 (2012.2.23)

【公表番号】特表2007-505723(P2007-505723A)

【公表日】平成19年3月15日 (2007.3.15)

【年通号数】公開・登録公報2007-010

【出願番号】特願2006-528125(P2006-528125)

【国際特許分類】

A 6 1 B 8/12 (2006.01)

A 6 1 B 5/1459 (2006.01)

A 6 1 B 5/02 (2006.01)

G 0 1 N 21/35 (2006.01)

【F I】

A 6 1 B 8/12

A 6 1 B 5/14 3 2 1

A 6 1 B 5/02 A

G 0 1 N 21/35 Z

【誤訳訂正書】

【提出日】平成23年12月28日 (2011.12.28)

【誤訳訂正 1】

【訂正対象書類名】明細書

【訂正対象項目名】0 0 2 5

【訂正方法】変更

【訂正の内容】

【0 0 2 5】

別法としては、図 1 C に示した実現例における脈管内プローブ 1 8 0 では、単一の光ファイバ 1 4 0 を送出ファイバ 1 2 2 及び収集ファイバ 1 2 3 の代わりに用いることができる。管腔内壁 1 0 4 から直接的に散乱光を収集することにより、管腔 1 0 6 内の血液を通して光の伝搬に起因する散乱を回避できる。結果として、別個の収集ファイバ及び送出ファイバを提供する必要もなくなる。その代わりに、単一のファイバ 1 4 0 を、非外傷性光カブラ 1 4 2 を用いた光の収集及び送出のために使用できる。図 1 C を参照すると、非外傷性光カブラ 1 4 2 は、動脈壁 1 0 4 の接触域 1 4 4 上に静止している。図 1 C に示したように配置すると、非外傷性光カブラ 1 4 2 は、ファイバ 1 4 0 を軸方向に伝わる光を接触域 1 4 4 に差し向ける。非外傷性光カブラ 1 4 2 から出た光は、動脈壁 1 0 4 を通過し、動脈壁 1 0 4 の裏側にあるブラーク 1 0 2 などの構造体を照らす。これら構造体は光の一部を散乱させ、接触域 1 4 4 に返す。すると、この光の一部は接触域 2 6 から動脈壁 1 0 4 を介して再出現する。非外傷性光カブラ 1 4 2 はこの再出現した光を収集し、ファイバ 1 4 0 内に差し向ける。光ファイバ 1 4 4 の近位端は、光源と光学検出器との両方に（例えば、光サーキュレータを用いて）結合できる。

【誤訳訂正 2】

【訂正対象書類名】明細書

【訂正対象項目名】0 0 3 3

【訂正方法】変更

【訂正の内容】

【0 0 3 3】

図 5 は第 5 実施形態の断面図を示し、ここで脈管内プローブ 5 0 0 は、固定コア 5 3 6 と、放射状に配列した光カブラ 5 1 8 と、放射状に配列した超音波トランスデューサ 5 2 0 とを備える。固定コア 5 3 6 を備えた第 5 実施形態は、コアが回転する上述の実施形態

よりも信頼性が高くなることがある。これは、第 5 実施形態にはトルクケーブルのような可動部分が無いからである。可動部分が無いことにより、外装 5 1 4 が万一破裂しても動脈壁が可動部分に接触しないので、脈管内プローブ 5 0 0 の安全性が向上する。